

この国に 生まれてよかった この時代に 生きてよかった

今回から3回分は、私の駆け出しの頃の現場体験をたどりたいと思います。年齢は、いずれも20代でした。はつきり言って、これらの体験がなかったとしたら、今の私はなかったと言っているでしょう。一つひとつの体験が文字どおり血肉となり、後の人生航路の方向舵（ほうかく）になっていっているように思います。

ただし、過去を懐かしむことが本稿の目的ではありません。できれば、私の体験を読者のみなさんと共有し一般化したいのです。一般化とは、過去の事実から現代に通じる課題を見出すことで、みなさん一人ひとりの考え

方や生き方に役立つものを感じ合えることかと思ひます。正直なところ、私もこのような観点で自身のたどった道を顧（かえ）みすることはそうありません。久し振りの回顧は楽しみでもあり、少しばかり心が高鳴（な）ってきます。

■最初の就職は都立小平養護学校

現場体験のトップバッターは、都立小平養護学校（肢体不自由養護学校 現在の都立小平特別支援学校）の時代です。ここで、1970年から1982年までの約12年間勤めま

た。

五組の親子ごとにグループがつくれ、教室ごとに割り当てられた知能テスト、運動能力の検査、学校医の診察、スクールバスに関する聴き取り、学校長との面接のコースを巡ります。教員たちは、二日間で得た資料を早く取りまとめました。手早くといっても、パソコンや輪転式の印刷機がない時代で、ガリ版印刷による深夜に及ぶ作業が続くのです。前述したように、「入学選考」の職員会議は2月下旬から始まり（開始時間は子どもたちの下校後）、決着がつかない場合は幾晩（いくばん）も続きました。当時としては珍しいビデオも用いられました。

一人ひとりの子どもをめぐって、毎年激し

いやとりがくりひろげられます。最後は決まって多数決となります。議長が、「適か否で決をとります。A子さんの入学を認める人は適に、認めない人は否に挙手を」、こんな具合で進行しました。

私にとって、多数決での決定は耐えられませんでした。思わず手を挙げて発言を求めました。70人もの先輩教職員を前にしての発言は勇気がいります。足も唇も震えました。タイミングを失ってはならず、まずは挙手をすのです。考えがまとまっていっているわけではなく、挙手をしながら考えるような状況でした。しどろもどろのなかにも、くり返したことがあります。それは、「多数決はおかしい」「教育権は誰も侵（をか）すことができない」「私たちの学校で定員を超える子どもを受け入れよう」の三点でした。

■図書室も職員室もこぶして

おびただしい数の障害のある子と家族を苦しめた「入学選考」は、1974年度の東京都の「希望する子どもの全員就学」の実施をもって終止符が打たれました（国の義務制は5年後の1979年度から）。

毎年度末の職員会議での議論をくぐりながら、教職員の意識は少しずつ変わっていきました。そうした影響もあってか、私たちの小平養護学校では全員就学以前から事実上の全入が始まっていました。都の教育庁が定めた定員の2倍近い子どもを受け入れたのです。こうなると教室が足りなくなります。図書室

■職員会議の多数決で子どもを選考

都内の養護学校では、毎年2月下旬から3月上旬にかけて「入学選考」のための臨時職員会議が開かれました。そこで次年度の入学児童を決定したのです。小平養護学校だけでも、多い年度は10人以上の不合格者を出しました。「入学選考」の結果は、学校の玄関（げんかん）に張り出されます。不合格となった母親たちの反応はまちまちでした。激しく教員に詰め寄る人もいれば、無言のままうつむいて帰る人もいました。私にとっては、思い出したくないシーンの一つです。

毎年2月の下旬になると、二日間にわたって在校生を休みにして、次年度入学を希望する子どもを集めます。教職員が総がかりで「入学選考」に必要な基礎資料を収集しまし



▲小平養護学校での機能訓練
出典：映画『ともだち』／重障児教育研究会監修、脚本・演出 杉原せつ、より



第3回 障害児の全員就学と地域での 運動起こし

藤井克徳

日本障害者協議会代表・きょうされん専務理事

ふじい かつのり／1949年生まれ。養護学校教員をへて、日本初の精神障害者のための共同作業所「あさやけ第2作業所」や「きょうされん」の活動に専念。日本障害フォーラム（JDF）や、日本障害者協議会（JD）など、様々な団体の役員をつとめる。